

The Garden-Party の文体

西 田 義 和

I

The Garden-Party(園遊会)は作者の生いたちや家庭環境がかなり影響すると思われるので、この小論を進める前に簡単に、作者の横顔を紹介することにする。名前は Katherine Mansfield(本名は Kathlee Mansfield Beauchamp)といい、1888年 New Zealand の首都 Wellington で生れた。父は富裕な実業家 (Harold Beauchamp)。マンスフィールドは三女であった。幼少時代地元の学校に通ってから、ロンドンのクィーンズ・コレッジに学び、1906年いったんウェリントンに帰るが、1908年に家族の反対を押し切って再び渡英する。そして、結婚、別居、妊娠、流産といった悲痛な体験をする。元来マンスフィールドは感受性が強く、豊かな空想力を持っていたが、一面また気まぐれで、この傾向は晩年に近づくにつれて強くなっていった。特に1915年10月フランスに出征した最愛の弟レズリーが爆弾投下実習中、あやまって死亡したショックは、彼女に文学創作上大きな決意と開眼を与えることになる。

マンスフィールドが異色ある短編作家として認められ、一躍文壇的地位を占めるに至ったのは、1922年の *The Garden Party and Other Stories* を出版してからであった。

しかし、1917年からむしばみだしていた病がこの頃にはかなり進行していた。そして1923年1月9日に、パリ郊外のフォンテブローにおいて、2度目の夫 Murry に見とられながら34歳の短い生涯を終えたのである。彼女の作品はすべて短編で、*The little Governess* や *The Doll's House* にみられるよう

に子供、女性を中心として故郷ウェリントンを舞台としたものが多い。

II

The Garden-Party (園遊会) は作者が亡くなる前の年に出版された作品で、短編集全体の表題でもある。彼女の作品としては比較的長い方である。この作品は作者のマンズフィールドの家庭環境にいくらか変化を加えたものである。家族構成は、父は Mr. Sheridan (シェリダン氏)、母は Mrs. Sheridan (シェリダン夫人) として出てきます。

主人公は15歳位の少女で、その頃の作者自身のようにである。名前は Laura (ローラ) である。姉が二人いて、一番上は Meg (メグ)、二番目は Jose (ジョウズ) という。妹や弟がいなくて、Laurie (ローリー) という兄が一人いる。彼は20歳位の青年で、作者は事故で亡くなった弟を兄のようにして、登場させています。シェリダン家は庭園のついた立派な家に住んでいる。この作品の最初のパラグラフは次のようになっている。

And after all the weather was ideal. They could not have had a more perfect day for a garden-party if they had ordered it. Windless, warm, the sky without a cloud. Only the blue was veiled with a haze of light gold, as it is sometimes in early summer. The gardener had been up since dawn, mowing the lawns and sweeping them, until the grass and the dark flat rosettes where the daisy plants had been seemed to shine. As for the roses, you could not help feeling they understood that roses are the only flowers that impress people at garden-parties; the only flowers that everybody is certain of knowing. Hundreds, yes, literally hundreds, had come out in a single night; the green bushes bowed down as though they had been visited by archangels.

(そして結局、天気は申し分なかった。注文をしたとしても、これ以上園遊会向きの日は得られなかったであろう。風はなく、暖かく、空に雲はなかった。ただ青空に明るい金色のもやがかかっていたのは、よく初夏の頃にある

The Garden-Party の文体

ことだ。植木屋はもう明方から来ていて働き、芝生を刈り、掃いたりしたので、芝草や、前に雛菊の植えてあった黒っぽい平らな円型花壇までがつつやと輝いているようだった。バラはと言えば、バラこそは園遊会の人々の心を打つ唯一の花であり、誰でもがきくと知っている唯一の花であるということ、をバラ自身が承知していると思わずにいられないだろう。何百、そう、文字通り何百というバラの花が一夜のうちに咲き出していた。

緑の葉をつけたバラの木々は、まるで天使たちの訪れを受けたかのように、頭を低く垂れていた。

最初の冒頭の **And** で始まる文に注目する必要がある。そして天気は申し分なかった。とある。これを考えるにはさらに続けて読んでいくと理解できる。園遊会を行うにはこれほど素晴らしい日は、たとえば注文したって得られなかったであろうといっている。私達が明日の楽しい行事が行われるかどうか天気の事を気にするように、この話に出て来る人達も園遊会当日の空模様を気にしていたわけである。風もなく暖かく、空には雲はなかったということで、登場人物達は園遊会ができることをとても喜んでいることがうなずけられる。彼らの喜びが読者にも直接伝わって来る。このように、いきなり話の途中から書き出す手法は小説ではそう多くはないが、時としてこのように **And** で始めたり、**And** を使用しなくても大人向けの小説では見うけられる。この場合作者がいきなり話の世界に連れて行くことが多いのであるが、この作品に限ぎると、冒頭の文で登場人物が読者をこの作品の世界に導いている。それからバラの花の様子を詳細に描写している。この事は主人公であるローラ達三人姉妹のことを述べているのである。

恐らくローラたちはそんなに意識はしていないが、本日の園遊会の花が自分達であると思っている。また自分達を目あてにやって来る人もいることを自負している。そういうことがバラの描写に映り出されているのである。次にカラカの大木の描写をみることにする。

Against the karakas. Then the karaka trees would be hidden. And they were so lovely, with their broad, gleaming leaves, and their clusters of yellow fruit. They were like trees you imagined growing on a desert island, proud, solitary, lifting their leaves and fruits to the sun in a kind of silent splendour. Must they be hidden by a marquee?

(カラカの木の前。それではカラカの木が隠れてしよう。ところがあれは広いつやつやした光る葉で、黄色の実を房々とつけているので、とてもみごとである。あれは、無人島に生えていると思われるような木で、誇らしげに、孤独に、無言の中にも堂々として、その葉と実を太陽に捧げていた。それがテントで隠されなきゃならないのかしら?)

続けて次の描写をみることにする。

It's all the fault, she decided, as the tall fellow drew something on the back of an envelope, something that was to be looped up or left to hang, of these absurd class distinction. Well, for her part, she didn't feel them. Not a bit, not an atom... And now there came the chock-chock of wooden hammers. Someone whistled, someone sang out, "Are you right there, matey?" "Matey" The friendliness of it, the—the—Just to prove how happy she was, just to show the tall fellow how at home she felt, and how she despised stupid conventions, Laura took a big bite of her bread-and-butter as she stared at the little drawing. She felt just like a work-girl.

(それはみんなあの馬鹿げた階級差別の誤りだと、ローラが決めていると、のっぽの男は、何か封筒の裏へ図を引いて、環にしてくるとか、ぶら下げておくところなど描いていた。そう、自分としては、そんな差別なんか感じない。ほんの少しも、すると木槌のカン、カンという音が聞こえてきた。ある者は口笛を吹き、ある者は「おい、兄弟、そこはいいのかい?」と誰かが

The Garden-Party の文体

大きな声で呼んだ。「兄弟！」その言葉の親しさ、その——その——自分がどんなに楽しいかを証明しようとして、こののっぽさんに自分がどんなに気安さを感じているか、そしてくだらない因襲を軽蔑しているかを現すために、ローラはその小さな図を見つめながら、バタ付きパンを大口にパクリとかぶりついた。すると彼女もまるで女労働者のような気持がした。

カラカの木はニュージーランドに生ずる大木である。バラの花がローラたち三人の姉妹を象徴しているように、このカラカの大木はこれから始まる園遊会の準備にとりかかる職人たちを象徴しているのである。ローラは自分たちと身分が違う職人たちの本当の姿を知ろうとして、頭の中では色々な事が交叉しても、眼は職人たち一人一人の手の動き、足の運びをおっているのである。彼女は職人たちの行動をこのように見つめながら、彼等の人生はカラカの大木のよう堂々として素晴らしいものにもかかわらず、自分たちと一緒にダンスをしたり、夕食を食べにやってくる、周囲の友達がこの職人たちとおつき合いをしないのは階級差別と思って、誤りを指摘するのである。そのことはカラカの大木が無人島に生えていると思われるような木で、誇らしげに、孤独に、無言の中にも堂々として、その葉と実を太陽に捧げていた。という文の中に現われている。カラカの大木が葉と実をならせることは天から与えられた使命である。そのことがこの大木の生きる目的である。我々人間も自分の使命を成し遂げることである。使命感に燃えていれば、人生は光輝き、色々な事に取り組んでもうまくいくことができるのである。さらにローラは彼等の木槌の音、口笛の響き、*matey* という語等を耳にして、何か親しみを感じる。そして職人たちと意気投合して嬉しくなり、その嬉しさを彼等にも知らせたくなる。そこで彼女は職人みたいにわざとバタ付パンを口に入れて、その図を覗き込んで、女労働者のようなふりをするのである。まさにそのカラカの大木は、堂々として職人たちの生きている姿を表わしているのである。ともかく人間は周囲の環境に影響を受けやすいのであるが、上流家庭に生れ育ったローラは、すでに思春期の時期に物事を見て、彼女なりのハッキリした考えを持っていたのである。次の箇所

も下層階級の描写である。かなり長いパラグラフであるが引用してみる。

That really was extravagant, for the little cottages were in a lane to themselves at the very bottom of a steep rise that led up to the house. A broad road ran between. True, they were far too near. They were the greatest possible eyesore and they had no right to be in that neighbourhood at all. They were little mean dwellings painted a chocolate brown. In the garden patches there was nothing but cabbage stalks, sick hens and tomato cans. The very smoke coming out of their chimneys was poverty-stricken. Little rags and shreds of smoke, so unlike the great silvery plumes that uncurled from the Sheridans' chimneys. Washerwomen lived in the lane and sweeps and a cobbler and a man whose house-front was studded all over with minute birdcages. Children swarmed. When the Sheridans were little they were forbidden to set foot there because of the revolting language and of what they might catch. But since they were grown up Laura and Laurie on their prowls sometimes walked through. It was disgusting and sordid. They came out with a shudder. But still one must go everywhere; one must see everything. So through they went.

(それは本当に途方もない話だった。というのは、その小さな家々は一かたまりになって、小路になっていて、この邸へ通じている急な坂道の下になっていたのだから。そして広い道路が、その家々と邸の間にあった。

成る程、それらはあまりにも近いのだ。非常に目ざわりで、大体この付近にあるべきものではなかった。チョコレート色に塗った小さなあばら家であった。その庭と云ったら、キャベツの茎と、病気の鶏とトマトの空カンがあるくらいだ。煙突から出る煙までいかにも貧しかった。きれぎれのほんのちょっぴりした煙で、シェリダン家の煙突から立ちのぼるもくもくとした、銀色の羽毛のような煙とはまったく違っていた。その小路に住んでいるのは、洗濯女、煙突掃除夫、靴直しや、また家の正面にちっちゃな鳥籠を一杯ぶらさげている男などであった。子供たちがうじゃうじゃしていた。シェリダン

The Garden-Party の文体

家の子供達が小さかったときは、足をそこへふみ入れることは禁じられていた。言葉のひどいのと、どんな病気をうつされるか分からないからであった。だが彼等が大きくなってからは、ローラとローリーはぶらぶら散歩に出かけた時、そこを通ることもあった。胸がむかつくほど汚らしいところだった。二人は身ぶるいして、出て来たのであった。しかし、人間は何処へでも行って見なければいけないし、何でも見なければいけない。それで彼等はそこを通りぬけた。

ローラの家から急な坂道を下ると、広い通りをへだてた反対側に袋小路があり、その両側にごちゃごちゃした小さな家が並んでいる。その家の様子を貧しげにそして詳細に描写している。その中でも特に興味深いのは、煙突から出る煙の比較である。彼等の煙突から出る煙まできれぎれにほんの少ししか出ない煙であるのに対し、シュリダン家の煙突からはもくもくした、銀色の羽毛のような煙が出ている。昔から日本やヨーロッパでも上流社会の人々は民家の煙突から出る煙で暮しぶりをはかったと言われている。上流社会の家は質のよい石炭をたくので、白い煙が黙々と出るのに対し、下層社会の家では、木切れとか、紙くずを少ししか焼やさないで、青い煙が少しだけ出てくるのである。それから子供がたくさんいます。家が狭いので皆んな外へ出てくる。しかしローラ達シュリダン家の子供達はそこへ足を踏み入れることを許してもらえなかった。悪い病気や、悪い言葉をうつされる危険があるからである。しかし成長してからは、ローラ達は、通るだけ胸がむかむかするほど汚たないと思うのに、あえてそこを通っている。子供のときはともかく、大人になった人間は、どこへでも行かなければならないし、何でも見なければならぬ。だから彼等はそこを通りぬけたのである。つまり、当時の英国ははなやかで、インド、オーストラリア、カナダ、ニュージーランドと植民地を開拓し、大きな会社を経営していた。これからの時代を背負う若者を世界のどこへでも行かせ、何でも見せてあげようということを英国政府は考えていたのである。作者マンスフィールドの祖先もそういう精神にかられて、ニュージーランドに移住して来たのである。

もちろんローラをはじめシュリダン家の子供達もこのような教育を学校で受けたのである。しかし、そういう気持で自分達の近くの下層社会の家の近くを通ったというのは、彼等の家が近くにあるながら、実は僻地も同然であり、行ったこともない見知らぬ土地であってもおかしくないことを意味している。そうでないと、色々な所に行き、何でも見るようにという当時の教えの発想は出てこない。シュリダン家の人達も他の良家の人達と同様にそういう眼で下層社会を見て来たのである。そうした教育がここではローラをはじめ上流社会の子供達に影響を与えている。しかしそれは今までのことであって、現在のローラには通用しません。これより前に園遊会が行われる表門の前で人が亡くなったことがローラ達に知らされると、園遊会を中止すべきだと主張するローラと、誰も中止を望んでいないと主張する姉ジョウズとの間に議論が生じる。

To Laura's astonishment her mother behaved just like Jose; it was harder to bear because she seemed amused. She refused to take Laura seriously.

“But, my dear child, use your common sense. It's only by accident we've heard of it. If someone had died there normally—and I can't understand how they keep alive in those poky little holes—we should still be having our party, shouldn't we?”

Laura had to say “yes” to that, but she felt it was all wrong. She sat down on her mother's sofa and pinched the cushion frill.

(ローラの驚いた事には、母親の態度もジョウズと全く同じであった。しかもローラの驚きを母親が面白がっているらしいので、ますます我慢が出来なかった。母親はローラの言う事を真面目に考えようとはしてくれなかった。

「でも、ね、常識で考えなさいよ。私達はそれを偶然耳にしただけのことでしょう。もしその人が普通に死んだのだったら、——どのようにして、あんな息苦しい穴ぐらみたいなところに生きていられるのか、私には理解できないが——やっぱり、私達は園遊会をやるでしょう？」それに対してローラは「はい」と言わざるを得なかった。でも、心の中では、それは全く間違いだと思ふのだった。彼女は母親のソファに腰を下ろして、クッションの縁飾り

The Garden-Party の文体

をつまんだ。)

園遊会を開くことに母親までがジョウズと同意見であるのにローラはびっくりする。それどころかローラの態度をおもしろがっている。その後の母親の反応はそれなりに説得力があり、理屈に合っている。近くに住んでいても、誰かが家の中でひっそりと亡くなれば、その知らせはローラには誰も知らせません。だから彼女も園遊会をやめるとはいわないはずである。しかしローラは反論こそできないが、ジョウズや母親の考えには納得しない。いくら理屈に合っても、近くで人が亡くなったのに、ローラ達だけが園遊を楽しんでいる気分にはなれないのである。この描写にも思いやりの精神がローラの心の中に強く残っている場面である。次の場面は園遊会が終り、招いた客を送り出した直後のシェリダン家の会話の一部である。

An awkward little silence fell. Mrs. Sheridan fidgeted with her cup. Really, it was very tactless of Really, it was very tactless of father... Suddenly she looked up. There on the table were all those sandwiches, cakes, puffs, all uneaten, all going to be wasted. She had one of her brilliant ideas.

“I know,” she said. “Let’s make up a basket. Let’s send that poor creature some of this perfectly good food. At any rate, it will be the greatest treat for the children. Don’t you agree? And she’s sure to have neighbours calling in and so on. What a point to have it all ready prepared. Laura!” She jumped up. “Get me the big basket out of the stairs cupboard.”

“But, mother, do you really think it’s a good idea?” said Laura.

Again, how curious, she seemed to be different from them all. To take scraps from their party. Would the poor woman really like that?

“Of course! What’s the matter with you to-day? An hour or two ago you were insisting on us being sympathetic.” Oh well! Laura ran for the basket. It was filled, it was heaped by her

mother.

“Take it yourself, darling,” said she. “Run down just as you are. No, wait, take the arum lilies too. People of that class are so impressed by arum lilies.” “The stems will ruin her lace frock,” said practical Jose.

(気まずい沈黙が一寸の間あたりを襲った。シェリダン夫人はもじもじしながら茶碗をいじくりまわしていた。本当にお父さまは気が気かない……と、突然、彼女は顔を上げた。テーブルの上には、サンドウィッチや、ケーキ、シユークリームが残っているが、これは皆無駄になってしまう。彼女に一つうまい考えが思いついた。

「わかっていますとも」と彼女は言った。「さあ、籠盛りを一つこさえましょう。このとてもおいしい御馳走を、あのお気の毒な人に差し上げましょう。とにかく子供達には最上の御馳走でしょうからね。どうですか、あなた？ それできっと近所の人達がやって来たりなんかするんでしょう。それに備えて、すっかり用意が出来ておれば、どんなに役にたつかわからないわ。ローラ！」と彼女は急に立ち上って言った。「階段の下の戸棚から、あの大きな籠を持って来て下さい。」「でも、お母さま、本当にそれがいいお考えだとお思いになって！」とローラは言った。

また、何とおかしいのだろう、自分とは皆と意見が違っているようだった。パーティーの残りものを持って行くなんて、あのお気の毒な女の人が本当に喜ぶかしら？

「勿論よ、あなたは、今日は、一体どうしたっていうの？ 一、二時間前には、あなたは私達に同情しなさいって言ったのに。」

ああ、いいわ！ ローラは籠を取りに走って行った。籠は母の手で詰め、たちまち山盛りにしてしまった。

「あなたが持って行くのよ。」と母親は言った。「そのままで、行っていらっしやい。あ、ちょっと待って、この百合の花も持ってらっしやい。あの階級の人たちは、百合の花を見たら、とても喜ぶでしょう。」

「あの茎は、レースの服を台なしにしますわ。」实际的なジョウズが言っ

た。)

シェリダン夫人がふと顔を上げるテーブルの上に園遊会の残り物のサンドウィッチ、ケーキ、シュークリーム等がある。それらを見て彼女は名案が浮かぶ。She had one of her brilliant ideas. とあるのは常日頃からシェリダン夫人は、そういうことをもってならしていたのであろう。早速彼女の名案でもって仕事が始められる。しかしローラは園遊会の残り物を持って、気の毒な女の人が喜ぶと思うかと母親のシェリダン夫人に聞くと、あたりまえでしょうと答えている。彼女は食べものをもらえば喜ぶものと信じている。相手の気持ちになったり、相手がどう考えるかなどは全く思っていないのである。長い間、上流社会の生活にそまり、考え方において、自分達の狭い世界から一步も外へ出られなくなった傲慢な人達の姿がここに代表されている。思いやりは相手に物を提供することだけではなく、相手の気持ちを思いやったり、相手と同じ気持ちになることである。シェリダン夫人や姉のジョウズにはその心がわかっていない。彼等は自分達のことしか頭にないのである。ローラはそういう考えについていけないのである。母親の命令でやむなくローラは空の籠を持って来る。その中に母親の手で一杯になり、山もりにされたのである。ローラはその様子を人ごとのようにながめている。つまり事が自分の意思に関係ないところで進んでいる。籠がいわば一人でにつめられ、山盛りになっていくのである。しかし本当は人ごとではないのである。ローラ、あなたのこの籠をあの人達のところに持って行きなさいと、母親は命じるのである。この事は皮肉で、ある意味では残酷な命令である。ローラは園遊会の残り物を不幸な家に持って行くこと自体心ないしうちではないかと疑問を感じているのである。園遊会の服装のまま一番気にしているローラに持って行くことを命じているのである。囲りの人達は誰も気がついていないようであるが、もしかすると、この事は母親のローラに対する処罰あるいは、反逆児に対する上流社会の制裁ととれてもよいのではないかと思われる。ローラは母親の命令通りに、その貧しい人達のところに出掛けて行く。そして事故で亡くなった若者の部屋に入る。

There lay a young man, fast asleep—sleeping so soundly, so deeply, that he was far, far away from them both. Oh, so remote, so peaceful. He was dreaming. Never wake him up again. His head was sunk in the pillow, his eyes were closed; they were blind under the closed eyelids. He was given up to his dream. What did garden-parties and baskets and lace frocks matter to him? He was far from all those things. He was wonderful, beautiful. While they were laughing and while the band was playing, this marvel had come to the lane. Happy...happy...All is well, said that sleeping face. This is just as it should be. I am content.

(そこには若者が、ぐっすりと眠っていた。——あまりにぐっすり寝ているので、その若者は二人から遠く離れているようだった。ああ、何と遠く、何と安らかに。彼は夢を見ているのだ。決して目をさまさせてはいけない。彼の頭は枕に埋まり、目は閉じている。

閉じたまぶたの下では、何も見えない。彼はその夢に浸っている。園遊会も籠もレースの服も、彼にとっては何の意味があるのだろうか？ そういうもののすべてから、彼は遠く離れているのだ。彼は素晴らしい、美しい。みんなが笑い興じている間に、バンドが演奏している間に、この奇蹟がこの小路に起っていたのだ。幸福だ……幸福だ……すべてよし、と、この眠っている顔は語っている。これが当然の成行だ。私は満足している。)

このパラグラフはローラが心の中に抱いた印象である。現実の世界で人が亡くなって、幸福だと言う人は誰もいません。しかし、ローラは今まで出入りを禁じられた場所にやって来て、亡くなった人の安らかな顔を見て、人間の本当の人生を発見するのである。我々の人生はローラのような上流社会の中にあるのではなく、彼等の外の世界にあることを彼女は強く認識するのである。

III

この作品の末尾のパラグラフでローラと兄ローリーとの会話がある。

The Garden-Party の文体

“Isn’t life,” she stammered, “isn’t life—” But what life was she couldn’t explain. No matter. He quite understood.

“*Isn’t* it, darling?” said Laurie. この *Isn’t* の斜字体は重要であるような気がする。読む場合も強く発音する。よく作家は強調したい文や語には大文字で表わしたり、このように斜字体を使用したりする。マンスフィールドの場合は、この作品の他の箇所にも斜字体の強調語がある。ローラにとって人生についてのハッキリした定義ができなかった。

そのことは作者のマンスフィールドの一面を表わしているのである。彼女は人生についての正確な理論を組み立てることはできなかったが、明るい人生や、苦しいそして悲しい人生を根底におきながらも、人生についての考えを前面にとらえようとしているのである。

それはこの作品の中にヒントとなるような事がいくつか述べられている。園遊会の行われる日の朝は天気がよく、多くのバラの花が咲いている。そのバラの花は皆が知っている花であり人の心をとらえる唯一の花である。これはローラをはじめとするシェリダン家の娘たちを象徴している。またそれなりに彼女達も自分達をたよりにやって来る人もたくさんいるだろうとひそかに自慢しているのである。それからカラカの大木についてである。

庭でせっせと働く職人たちのように、生きる目標を持ち、無人島でもはりあいを失わずに自分の本分をまっとうできる大木のような男たちの生き方である。さらに上流社会の近くの貧しい家で、若者の亡くなった顔を見たときにも本当の人生は、彼女の住んでいるような環境の中ではなく、外の世界にあることを知ったのである。このように一部には題名のようなはなやかさを内包しつつも、作品全体としては、下層階級の人間の死を通じて、すべての人間社会の意味を問うているのである。